

句集
青山椒

あおさんじょう

吉田康子



溶接の火花とどきし柿若葉

入園の子に箸紙の花すみれ

温め酒当屋引き継ぎ終へにけり

干布団思ひの外にふくらみし

着ぶくれて回転扉怖れけり

地球儀を廻して夫の煤逃げす

葉桜に赤子の足のくびれかな

町内のパン屋起きをり花うつぎ

干柿の色を違へる家二軒

精根の尽きてひまはり種はじく

い
つ
ぽ
ん
の
蛍
袋
の
雨
催

弾
き
ゐ
る
紙
の
袋
の
蝗
か
な

日
が
射
し
て
夜
火
事
の
跡
の
霜
柱

横
の
子
は
知
ら
ぬ
子
な
り
し
椎
拾
ふ

秋
風
に
吾
が
泣
き
顔
を
思
ひ
出
す

追伸の気になつて来し荻の声

三味線草振ればむかしの音したり

日が海へ落ちてしまひし花辣蕪

約束の場所のぎんなん降りつづく

潜り戸をくぐり雛の日なりけり

修復の仁王を包む秋の昼

池昏れて鹿の背にある梅明り

落慶の幕くぐりゆく秋羽織

まくなぎを払ひ鉛筆供養の僧

二月堂にて肩の雪はらひけり

猿沢の亀に餌をやるサングラス

籠り僧に桜前線過ぎにけり

蛤の殻で金魚の選られけり

五位蹄く夜尼ヶ辻まで用のあり

耳ぽんとつまる機内の桜餅

珊瑚礁の波にぎやかな夜の秋

鬼太鼓の顔ふり向きし夜の緑

網寄せて諸子の鱗零しけり

水無月の浜に揚がりし桜えび

人力車の膝の上なる柏餅

セーターのアンパンマンの背のびなり

牡丹雪犬にまつ毛のありにけり

手の平にへばりつきたる種鶏頭

耳たぶの大きな人と野蒜つむ

蝉殻の背中に立てし五円玉

抽出の紙魚が四角く走りけり

山椒魚好きも嫌ひもなかりけり

風鈴のとだへぬ皆既月蝕に

種ひまはりフェンスに凭れきつてをる

鍵穴のががんぼ吹いてとばしけり

杭の紐ゆすりて金魚産卵中

畳のへり泳いで来たる銀の紙魚

松過ぎの川を流るる杉の箸

ビニールの袋の吐息青山淑

星祭り夫はだまつて犬洗ふ

寡黙なる夫に金柑煮てをりぬ

句集 青山椒

2003年3月30日 発行

著 者 吉田康子

発行所 本阿弥書店

PDF製作 俳誌のsalon